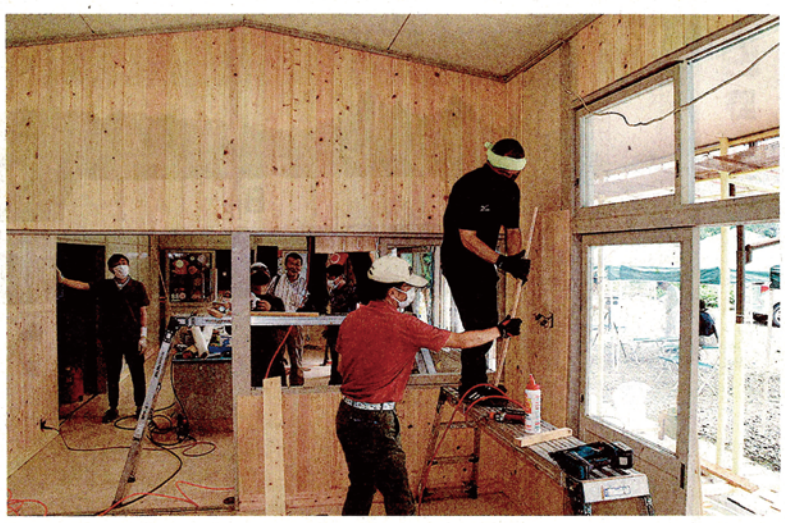
支え合い拠点 住民らの手で

「しきしまの家」整備進む 豊田



ヒノキの板を壁に取り付ける自治区住民ら＝豊田市杉本町のしきしまの家で

移住者の増加を目指す取り組みで全国的に注目されている豊田市旭地区の敷島自治区で、保育所だった建物を、地域の支え合いの拠点「しきしまの家」に改装するプロジェクトが進められている。二十、二十一の両日には、地元住民らが建物内の壁張り作業などに取り組んだ。

建物は一九七一年に建築された鉄骨平屋。百五十八平方㍍のうち百三十平方㍍を「しきしまの家」として使う。

並んだ三部屋のうち、中央は事務室。スタッフが常駐して電話を受け、地域で困り事を抱えた人と、解決できる人との間を取り持つ「しきしま支え合いシステム」の拠点とする。住民が立ち寄ってお茶を飲んだり、休憩したりするスペースも設ける。

作業には住民のほか、自治区と交流のある愛知学泉大の学生たちや支援企業の従業員も参加。地元の大工に教わりながら、ヒノキの間伐材を薄い板に加工して壁に張り付けると、室内にさわやかな木の香りが漂った。

来年四月のオープンに向け、現在は自治区の住民に「自分が支援できること」などを登録してもらっている。プロジェクトリーダーの板倉小夜子さん（六八）は「電話すれば誰かに助けてもらえる安心感を持てるようにしたい」と語り、後藤哲義自治区長は「地域で困った人を気軽に助けられるシステムづくりがしたい」と話した。（服部桃）

茶 南山園 アピタ安城南 ヴェルサウォーク西尾 製造元